

多くの体験や経験を積めるよう
手助けするために、
親御さんには環境を整え、
機会を提供してあげてほしい。



進学校として名高く、歴史も長い灘中学校・高等学校は、2020年の入試改革をどのように捉えているのでしょうか。「入試制度や社会の教育の流行が変わっても、教育において本質的な人間力を育てることが重要であることは不変」と語る和田孫博校長に、教育理念や教育方針、実際に行われているアクティブラーニングについてお尋ねしました。



入試が変わっても、教育の本質は変わらない。

—— まずは、和田校長の教育理念についてお聞かせください。

「不易流行」という言葉をご存じですか。「不易」とは、いつまでも変化しない本質のこと。「流行」とは、その時々に合わせて変化を取り入れることです。これは松尾芭蕉が残したとされる言葉で、「不変の真理を知らなければ基礎は確立せず、変化を知らずにいけば新たな進展がない」という真理を表しています。

思うに、学校教育にはこの不易流行という思想が重要なのです。しかし、いまは政府主導の教育改革が進んでいくなかで、「流行」だけが重んじられている気がする。そこに懸念を抱いているのです。



私は、時代と生徒が変わっても教育の本質が変わることはない、と考えています。例えば、現行の大学入試制度は本来の教育の評価をするにはふさわしくない内容になっている。そのために文部科学省が入試改革を進めているわけですが、「本来の教育のあるべき姿」を追求してきた学校にしてみれば、入試制度が変わっても、学校側として教育方法の改革を行う必要は特にないはずですよ。

では、「本来の教育」とは何か。本質的な人間力を育てることに尽きるでしょう。創立以来、そのような教育を行ってきた灘中学・高校にとっては、これまでと同じ教育を行っていけば、自ずと新しい入試制度に対応できる学力と人間力が



身につくはずです。

また、本校は、1927年の創立以来の歴史と伝統をもつ中高一貫校でもあります。ある程度は時代に適応したカリキュラムを組むことも必要ですが、校風や伝統を犠牲にして「流行」にのみ走ることは、私学の存在そのものを壊すことになってしまいます。一方で、テクノロジーの進歩などに置き去りにされるわけにもいきませんから、「不易」を念頭に置きながら、改革を進めることが大切だと考えています。

—— 灘高校の歴史や、創立以来守り抜いてきた教育方針について、さらに詳しく教えていただけますか。

本校の教育方針は、創立の経緯とも密接に関わっています。

灘高校のある阪神地域は、大正時代から教育に関する関心が別格なほど高い地域でした。大阪の商人の多くがこの地域に住んでいて、環境のよいこの土地で子弟に質の高い教育を受けさせたいと考えていた。それで当初は公立の中学校（旧制）に子弟を通わせていたのですが、生徒の定員の問題が発生し、「私立の中学校をつくってほしい」という要望が出たことで新しく設立されたのが灘中学校です。

その際に顧問を任されたのが、講道館を創始し、東京高等師範学校（現・筑波

大学）の校長を務めた嘉納治五郎先生でした。彼はもともとこの地域の出身であり、自分の理想とする教育を追求する学校をつくりたいと考えていたようで、本人も快く受け入れたそうです。

彼は、自らが講道館柔道で唱導していた「精力善用」「自他共栄」の考え方を、灘の校是にも援用しました。「精力善用」は自分の長所・短所を自覚したうえで、良い部分を伸ばしながら、足りない部分も克服していき、できることに全力で取り組むこと。「自他共栄」とは、自分の力を最大限に利用し、さらに、みんなが自分の力を発揮することで幸せな世界をつくっていくことです。教育において精力善用・自他共栄という言葉を考えるなら、誰でも得意な分野とか不得意な分野があるし、どんなに優秀な人でもオールマイティーということはない。だからこそ、自分の持っている力を最大限に発揮し、一方で他の人が得意とする分野はその人に任せ、皆が力を合わせることでより良い社会を作っていくことが重要で

す。

この校是のもとに、灘中学・高等学校では、まず生徒一人ひとりが本来もっている能力・長所を自ら見極め、それを最大限に発揮し、お互いに力を出し合って補い合うことを大切にしています。

また、この校是を実現するためには、画一教育はふさわしくありません。それぞれの個性を発揮したり、それぞれの力

を伸ばしたりしてもらうためには、自由度、自主性を、重んじる必要がある。そうした背景から、近年注目されているアクティブラーニングについても、本校の場合は建学の時期からその土壌ができていたと考えています。よって、教育の内容を急に替えたり、何か新しいものを取り入れたりする必要はない。大切なのは、生徒がいかに関心と好奇心を持って学んでいくかであって、深い学びのない表面的な授業を行っていてもあまり効果がないのです。

—— では、具体的に学校は何をされているのでしょうか。

教具や機器に頼らず、生徒が積極的に取り組みたくなるような Impressive（印象的）な授業を行うことを追求しています。例えば、土曜講座など、物事の本質を追求していくことに重点を置いた教育を行っています。

また、意外に大切なのが、教員の自由度を高くすることです。建学の際、治五郎先生は自分の愛弟子を校長にしたのですが、初代校長は教員に自由に授業をさせることを重んじました。本校で有名な橋本武先生の『銀の匙』という本を1冊読み上げる国語授業も、この流れを汲んだもの。書き残したものを読んでみると、橋本先生は新卒でこの学校の教員になり、最初に校長に出会ったときに「自分の好きなように授業をやりなさい」と言われたことがわかります。そこで橋本先生が編み出したのが、『銀の匙』に凧揚げのシーンが登場すれば実際に凧をつくってみるといような、言葉や文化、生活までを徹底的に調べながら生徒が実際に体験していくという授業だったので

す。

橋本先生の逸話ばかりが有名になっていますが、現在でも灘の教員は基本的に全員がこのような教育方針をもっています。同じ数学や英語を教えるにしても、

高校では教員によって使う教材が違いますし、教員全員で共通してやるべきことが決まっているわけではないんです。

——教員によって使う教科書や教材が違うというのは驚きです。

中学校は無償教科書なので、全学年同じ教科書を使わざるを得ないのですが、高校は有料の教科書なので、教員がそれぞれ選ぶのです。私自身も、上の学年が使っているとノートなどがそのまま下に

流れる可能性があるのですが、あえて違う教科書を選ぶこともありました。教師のなかには1冊の教科書では満足いかに、自主編集のテキストをつくる先生もおられます。

最近の例でいうと、日本史のある教員は、中学1年生の授業で、テーマを設けて、生徒にグループ単位で調べる時間を与え、クラス全員の前で発表させています。発表の際に質疑応答をしながら、必要な知識を肉付けしていくんですね。こ

のように、灘では生徒と教員のコミュニケーションのなかから学んでいくことも大切にしています。そういう工夫が、本校の教育の中心になっているのです。

学校は、生徒の好奇心を育て、応援する場である。

——灘中学・高校の生徒には、どのような特徴がありますか？

物心ついたときからずっとコンピューターやスマートフォンに触れ続けているデジタルネイティブである、というスペックの変化はありますが、本質的な中身はそんなに変わりません。基本的には好奇心旺盛で、自分の個性を伸ばすことに積極的な生徒が集まってくるころは不変だなと感じています。

学校としてもせっかくの好奇心を阻害しないよう、補習などをほぼせずに、夏

休みもたっぷりとして、スポーツ、読書、趣味などの自由な課外活動をたくさん行えるように配慮しています。

——個性を育む環境を整えることで、どのような人材が育成されるとお考えですか。

未知の課題を克服していく「真のグローバルリスト」です。

真のグローバルリストに必要なのは「異文化コミュニケーション力」と「多様な人と協力して課題解決する能力」です。

そのために必要なのは学校がアクティブラーニングの場になること。土曜講座もその例ですが、ほかにも例えば生物研究部は近くの川に採集に行き、学校に戻ってきて一緒に解剖したり、生態を調べたりする。そのための解剖の道具、生態を調べるための資料を豊富に取り揃えています。

テクノロジーについても、情報・技術の授業でパソコンの使い方を教えますが、さらなる興味のある生徒には、土曜講座などで専門的な知識を持つ教員・OB・社会人から学べる機会を設けています。

——伝統的な教育方針を保ちつつ、コンピューターを使った教育も進められているということですね。何か特別気をつけている指導などはありますか。

前述のとおり、いまの子どもたちはデジタルネイティブですから、学校で指導しなくてもすでにIT機器を使うことができる。そのため、本校では、ICTは生徒に使い方を教えるものではなく、教務・校務の省力化に利用するものと捉えています。出席簿管理システムの開発や、大学入試改革に伴うeポートフォリオの活用などが、その具体例です。



また、生徒が校内でコンピューターに触れる例としては、「時間割変更板」を校内2か所に映し出す動画を配信していたり、PC教室およびICT教室においてモニターを見ながら英語の授業を受けたりしています。各教室にも、50インチと小さいですがディスプレイを設置していますし、移動式のプロジェクターとスクリーンを使用する教師もいます。もちろん黒板とチョークが大事という先生もいますから、うまく折り合いをつけながら併用しているというところでしょうか。

現代では最先端の技術とされているものも、社会全体が進化していくと、その技術をもっているだけでは通用なくなってしまう可能性もあります。20年後、30年後の世界を想像したとき、いま最先端と考えられている専門・細分化された特殊な知識・能力を身につけるよりも、どんな時代や技術にも適応できる人間力を養っていくことの方が重要なはず。では、その「人間力」をどのように育てるか。やはりそれは基礎的な学力や教養を身につけて、課題解決の素地をつくっていくことに帰結すると考えます。

—— コンピューターのリテラシー教育についてはいかがですか。

リテラシー、つまりテクノロジーを使うためのルールとやマナーを学ぶことは非常に重要です。いま本校でトラブルがあるとすれば、頻度は低いけれどSNSのトラブルがメイン。使い方を一歩間違えれば、自分や他人の人生に間違った影響を与えてしまうということを覚えてほしいですね。ですから、必ずしも情報の授



業だけでなく、場合によっては家庭科の授業などでも身につけていくべきと考えられています。

—— テクノロジーがもたらしている恩恵はどのように感じますか。

デジタルネイティブの生徒を見ていて感じるのは、我々の世代がAIに対して持っている不安や恐怖とはだいぶ違うものをもっているということ。それらを活用して自分はどうするのか、という手先に進んでいるんですね。

例えば、放課後も昼休みも機材は使っていることになっているので、趣味の深掘りをする生徒もいるし、それに付き合えるだけの教員やSEもいる。ロボット製作やソフト開発のできるクラブに入部している生徒もいる。多様化する興味に合わせ、それを伸ばすために学校ができることを補助しているという状況です。とにかく、安心・安全な環境が整えることで、生徒はめきめきと育っていくので、頼もしいかぎりですね。

—— 最後に、未来を担う子どもたちの親

御さんへメッセージをお願いします。

まず、「子どもは親の背中を見て育つ」と言いますから、親御さんがどうあるかというのは子の成長にとって重要です。

テクノロジーに関して言えば、我々の時代だと「テレビなんか見たら馬鹿になる！」と見させなかったり、いまでもテレビゲームやネットサーフィンをさせなかったりする親御さんが多いけれど、なんでも勉強の邪魔になるからと取り上げてしまうと、本当に時代に取り残されていく可能性がある。子どもが好奇心をもったときには、その芽を摘まずに、伸ばしてあげてほしいですね。とにかく子どもの芽をつぶさないこと。興味・関心のある内容についてさらに詳しく調べたり、多くの体験や経験を積めるように手助けするために、親御さんは環境を整えたり、機会を提供してあげたりしてほしい。特に、興味・関心を深掘りする際に、テクノロジーは必須な時代ですから、リテラシーなども含めて、ご家庭でもとことん話し合いをなさったらよいと思います。

用語解説

講道館

1882（明治15）年、嘉納治五郎が創設した柔道の総本山。段位の発行、大会開催、講習会、季刊誌の発行、書籍の刊行など、柔道普及のための活動を行っています。

嘉納治五郎

1860（万延元）年、兵庫県生まれ。講道館柔道の創始者であり、柔道・スポーツ・教育分野の発展や日本のオリンピック初参加に尽力した、「日本の体育の父」とも称される人物です。

アクティブラーニング

学習者である生徒が、能動的に学ぶことができるような授業を行う学習方法。ドラマを通じて、生徒が能動的・活動的に学習するドラマエデュケーションなど、さまざまな手法があり、21世紀型教育の一つのポイントとして多くの学校で取り入れられはじめています。



2002年度より、土曜日に開講される特別講座「土曜講座」を行っています。

土曜講座の目的は、生徒が、通常の必修科目やカリキュラムだけでは知り得ない社会のさまざまな仕事や分野に触れるきっかけをつくること。すべての講座には、本校のOBをはじめ、その分野の第一線で活躍する専門性の高い方をお招きし、中高生には多少難解な内容であったとしてもトップレベルの実技や講演を行っています。2018年度の後期には、辻調理製菓専門学校講師による「料理初心者のためのイタリア料理講座」や三菱商事の社員による「総合商社で海外と仕事をすること」など31講座を実施しました。また、OBが自ら土曜講座の講師となることを希望する場合もあり、各業界のトップクラスの層に卒業生がいることも灘高の財産です。受講する生徒にとっては、大学や仕事などの進路を考える一助となることでしょう。

土曜講座の開催頻度は6月の土曜日の3回と、10月の土曜日の3回。高校生1・2年生は、6・10月にそれぞれ1講座ずつ受けることが必須です。また、前期にあたる6月の土曜講座については、講座を通じて興味・関心を持ったことについて調べ、レポートにまとめて提出することを課しています。

受講する講座は、自分の好きなものを

選ぶことができます。自ら選んでいる分、生徒も講座に積極的で、実技のあるクラスはいずれも大変盛り上がりますし、質疑応答も活発です。また、学年の枠を超えてクラスを設定していたり、中学・高校の共通講座もあったりすることから、先輩・後輩から刺激を受けられるのも土曜講座の特徴です。

2018年度後期の土曜講座で特に人気だったのは、本校OBで外務省人事課企画官による「外交官というキャリアデザイン」と「国際情勢を見極める」でした。また、理数系の講座のなかでは特に工学系の講座に多数の生徒が集まっていました。これらの傾向から、2018年度後期については、実社会で役立つ知識や技術に関心を持つ生徒が多かったという印象をもっています。

また、人工知能に関する講座にも力を

入れています。平日に行っている通常の授業でもコンピューターを使ったり、AIに関連したりする内容を取り入れてはいますが、土曜講座ではさらに深掘りし、「情報科学の面白さを体感！～OBトークとゲーム開発を通じて」という講座を行いました。趣旨は、情報科学やエンジニアリングの魅力を体感してもらうこと。講座では受講生をいくつかのチームにわけ、チームごとにゲームアプリの開発に取り組みました。

土曜講座は、未知の分野に触れる機会になると同時に、自分の興味・関心のある分野についてはより高度で専門的な知識や体験を得られるものとして、生徒からも好評を得ています。

